高校生の「学校の安全・安心」に関する認識の分析（１）

―学校による安全への取組と安全に関する自己認識の概観―

福本　昌之[*1]・難波　知子[*2]・池田　隆英[*3]・湯藤　定宗[*4]

【要　旨】　高校生の学校に対する安全・安心に関する認識を把握することを目的に質問紙調査を実施した。その結果，本調査においては，高校生たちは自分たちの所属校が自分たちの安全・安心な学校生活を送ることができるように心がけており，また，彼ら自身も安全・安心な学校生活を送ることができていると全般的に肯定的な捉え方をしていることが明らかになった。高校生にとっての安全・安心の認識は，彼ら自身の個人としての安全・安心に関わる力量の評価および彼らの所属校の文化が影響を及ぼしていると考えられる。後者については，とくに，学校に対する信頼とともに学校文化への適応・習熟が重要な役割を果たしていることが示唆される。

【キーワード】　学校安全　危機管理　高校生　安全への取組　学校組織文化

Ⅰ．研究の目的と背景

本稿の目的は，生徒の安全・安心意識が学校における危機管理の前提にあるという仮説に基づき，高校生の学校に対する安全・安心に関する認識を把握することである。

近年，学校における安全・安心の確保が重視され，危機管理への関心が高まり，様々な施策が急速に進められてきた。ところが，教育を受ける生徒の側においては安全・安心がどのように受け止められているか，とりわけ，生徒の視点に立った安全・安心な“学校文化”が組織としてどのように構成されているか，またそれがどんな効果をもたらしているかについては十分な知見が得られていない[注1)]。

文部科学省（2010，2018）は学校安全を安全管理，安全教育および組織的活動という３つの領域で捉える。しかし，管見では，学校によっては，非常時における行動指針が生徒に周知されていない，教育活動の中で活かされていないなど，学校経営の実践的な取組において三者は分立したものとして捉えられ，必ずしも学校運営レベルと教育活動レベルでの関連性が十分に図られていない様子も見られる。

例えば，「学校の危機管理マニュアル作成の手引き」（文部科学省，2018）は危機が発生した

令和元年 10 月 28 日受理

＊1 ふくもと・まさゆき　大分大学大学院教育学研究科（教育経営学）
＊2 なんば・ともこ　川崎医療福祉大学医療技術学部（学校保健学）
＊3 いけだ・たかひで　岡山県立大学保健福祉学部（学校教育学・教育社会学）
＊4 ゆとう・さだむね　玉川大学教育学部（教育経営学）

際の学校が児童生徒の安全を確保するための手立てを重視しており，安全を担保する主体としての学校，安全を担保される客体としての児童生徒という関係性が前提となっている。学校管理下における児童生徒の安全を確保することは学校の法的責任であることは言うまでもないが，その 3 つの領域が有機的に関連づけられているかについては疑問がある。とりわけ，非常時に適切な対応ができる資質能力は基本的には個人に帰するものではあるが，学校はその資質能力を育む場であり，そのための教育機会を積極的に用意する必要があると考えられる。

1　先行研究の概要

1）学校安全と危機管理の概念

NDL データベースで検索する限りにおいては，学校を対象に初めて危機管理の用語を使用した著書は 1991 年に 2 冊刊行されている。また，小柳（2013）は 1990 年代に入り，学校における危機管理に関する特集が雑誌で本格的に組まれ始め，2000 年代には，実践家に向けて，危機的場面の発生を予防するための日常的な取組や危機が発生した場合の対策等について，具体例を挙げながら示した書が相次いで刊行されるようになったことを指摘している。

しかし，その概念は多様である。例えば，大泉（2004）は，学校の危機管理は，児童・生徒の「教育」と「管理」の二つに大別できると述べる。前者は，児童・生徒が自らの力で学内外における生活の様々な危険に気づき，的確な判断によって安全に行動ができる能力を身に付けさせるための教育であり，後者は，学内外における児童生徒の安全を守り，学校教育の円滑な運営を可能にする「安全管理」であるとする。大泉は「安全管理」の内実を危機管理過程として示しているものの，安全管理と安全教育を別次元で捉える初期の学校安全の捉え方と同義であり，危機管理と安全管理が同一視されるという混乱が生じる可能性がある。

学校安全とは異なった文脈で危機管理を捉える研究もある。例えば，前田（2009）は　学校における危機管理が要請されるようになった背景をふまえ，従来あまり重要視されていなかった問題への対応が求められるようになったことから，従来の学校安全との関係において，「潜在する危険を除去して安全な環境を創り上げていくという『学校安全』概念には，実際に危機が発生した場合の対応という視点が欠けていることから，教育学の分野における研究にも『危機管理』という用語が頻繁に使用されるようになった」（前田，2009，46）と指摘する。

以上のように学校における危機管理は安全管理と共通する部分を持ちながらも，新しい課題を提起しているが，それらの異同は明確でなく，また，大泉（2004）の提起する「管理」と「教育」の関係性も明確には整理されていない。

2）高校生における危機管理意識の調査

高校生の安全意識を学校との関連において把握しようとする研究も管見の限り見当たらない。安全意識を調査したものとして明石（2016）があるが，一般的な社会生活における事故や犯罪被害等に対する意識及び経験についてのサーベイが報告されているにとどまり，学校教育や学校生活との関連は扱われていない。この調査においては高校生の個人レベルでの意識調査が実施されているため，学校に対する安全認識は明らかではない。また，高校生を対象とした諸調査を約 20 年にわたって扱った『モノグラフ・高校生』[注2)] を総集した『モノグラフ・高校生特別号』（2004）においても，安全意識に関する言及はない。これまで関心があまり向けられてこなかった理由は，高校の教育活動において安全の積極的な確保という視点が持ち込まれていなかったためだと推測される。

学校の構成員である生徒の安全認識を把握することは，学校における危機管理を教育的側面から捉えるためには重要だと考えられる。そこで，本研究では，生徒が持つ学校に対する安全・安心観に注目し，その実態を分析考察する。

Ⅱ．研究の方法

1　調査の内容

本稿においては，高校生を対象とした質問紙調査（以下，本調査）を分析対象とする。本調査は，高校生の安全・安心に関する認識及び知識の現状，および，それらが学習経験や学校生活などとどのように関連するかを概括的に把握するため，以下の 6 領域に関わる事柄を把握することを意図して構成した。①「身の回りの安全」の考え方，②学校の安全についての現状認識，③安全な日常生活を送るための知識・技術の理解と実行可能に関する認識，④学校の様子（学校文化）に関する認識，⑤生徒たちの危機に対する対処方法の理解度に関する認識，⑥安全な生活を送るための心がけ。

2　調査の方法及び対象

本調査は，本調査の趣旨を説明したうえで，同意の得られた公立高等学校の 6 校の協力を得て，2018 年 11 月に実施した。調査回答の対象者数及び対象学年等は各校において予め選定した上で，調査票を 11 月上旬に各協力校に一括して送付した。3 週間程度の期間をおき，調査票の配布，回答時間の確保，個別の回収方法は各校に一任することとし，学校単位での一括回収後，返送を依頼した。ただし，倫理的配慮として，調査票には，調査の趣旨，方法，匿名性の確保などの事項を明記するとともに，調査票の回収に際しては，回答者自身が調査票を封筒に封入することとし，回答内容の守秘と回答者の自由意思による回答を保証することとした。なお，本調査の実施に先立ち，研究代表者の所属機関における研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号：教研承-H30-008）。

以上の手続きに基づき，11 月 12 日から 11 月 30 日の間が実質的な調査期間となり，調査票配布数 2,226，調査回答者数 2,144，回答率 96.3%であった。このうち，全質問項目に対して完全回答された有効回答 1,973（配布数の 87.3%，回答数の 90.7%）を分析対象とする。

Ⅲ．結果

各質問項目に対する回答傾向の概要を把握するため度数分布および記述統計を示す。また，学年による回答傾向の差を平均値において比較するため，学年を要因とする分散分析を行った。その結果を別紙表 1-1 から表 6-2 に示す。

1　「身の回りの安全」の考え方

表 1-1 は，安全・安心の捉え方に対する認識についての，5 件法での回答結果である。安全な暮らしを送るために，「自分の身は自分で守る」という自分自身が自己防衛的な姿勢を持つことと，事故が起きにくいような環境や条件の整備の双方について，高い肯定的な回答が得られた。自己防衛と環境整備の両者が重視されており，差異は見られなかった。また，安全の定義

に関しては，「事故が起きない状態」と「事故を回避できる状態」のいずれについても肯定的な回答が得られ，差異は見られなかった[注3)]。

表 1-2 は，学年別の平均値の比較を示したものである。いずれの項目においても，2 学年より 3 学年でより肯定的な回答が見られた。

表 1-1 安全な生活を送るために配慮すべき事柄（度数分布）

項目	①まったくそう思わない	②あまりそう思わない	③どちらともいえない	④少しそう思う	⑤強くそう思う	④＋⑤	①+②
1 安全な暮らしを送るためには，「自分の身は自分で守る」という姿勢を持つことが最も大切である。	1.1	1.1	4.3	31.4	62.1	93.5	2.2
2 安全な暮らしを送るためには，身の回りの環境や条件を整えることが最も大切である。	0.8	1.1	5.3	30.4	62.4	92.9	1.9
3 安全とは，事件や事故などが起きない（あるいは起きにくい）状態である。	1.8	3.5	11.8	33.5	49.5	83.0	5.3
4 安全とは，事件や事故などを回避できたり，被害を最小限に抑えたりできる状態である。	2.1	4.9	14.1	36.9	42.0	78.9	7.0

N=1973 数値は%

表 1-2 安全な生活を送るために配慮すべき事柄（学年別平均値・標準偏差，分散分析）

項目	1年 (N=564)		2年 (N=958)		3年 (N=451)		全体(N=1973)		分散分析		
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F 値	P=	下位検定
1 安全な暮らしを送るためには，「自分の身は自分で守る」という姿勢を持つことが最も大切である。	4.51	0.73	4.49	0.76	4.61	0.69	4.52	0.73	3.98	0.02	2<3
2 安全な暮らしを送るためには，身の回りの環境や条件を整えることが最も大切である。	4.54	0.72	4.47	0.74	4.62	0.66	4.53	0.72	6.29	0.00	2<3
3 安全とは，事件や事故などが起きない（あるいは起きにくい）状態である。	4.24	0.91	4.21	0.94	4.37	0.87	4.25	0.92	4.40	0.01	2<3
4 安全とは，事件や事故などを回避できたり，被害を最小限に抑えたりできる状態である。	4.15	0.93	4.04	0.99	4.24	0.95	4.12	0.97	6.78	0.00	2<3

1：全くそう思わない⇔5：強くそう思う

2 安全・安心な学校に対する認識

表 2-1 は，所属校における学校の安全・安心に対する認識についての，5 件法での回答結果である。「1 この学校は，生徒たちが安全に学校生活を送ることができるように心がけている」，「2 この学校は，生徒たちが安心して学校生活を送ることができるように心がけている」，「3 この学校の生徒たちは，安全な学校生活を送ることができている」，「4 この学校の生徒たちは，学校生活を安心して送ることができている」の 4

表 2-1 「安全・安心な学校」についての認識（度数分布）

項目	①まったくそう思わない	②あまりそう思わない	③どちらともいえない	④少しそう思う	⑤強くそう思う	④+⑤	①+②
1 この学校は，生徒たちが安全に学校生活を送ることができるように心がけている。	2.1	5.3	17.9	44.1	30.6	74.7	7.3
2 この学校は，生徒たちが安心して学校生活を送ることができるように心がけている。	2.2	5.8	17.7	42.6	31.6	74.2	8.1
3 この学校の生徒たちは，安全な学校生活を送ることができている。	1.8	5.2	19.4	41.6	32.0	73.6	7.0
4 この学校の生徒たちは，学校生活を安心して送ることができている。	2.0	5.0	18.0	41.3	33.7	75.0	7.0

N=1973 数値は%

項目すべてで，肯定的回答割合が約 75%，否定的回答が約 7%であった。

表 2-2 は，学年別の平均値の比較を示したものである。いずれの項目においても，1 学年でより肯定的な回答が見られた。

表 2-2「安全・安心な学校」についての認識（学年別平均値・標準偏差，分散分析）

項　目	1年 (N=564)		2年 (N=958)		3年 (N=451)		全体 (N=1973)		分散分析		
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F 値	P=	下位検定
1 この学校は，生徒たちが安全に学校生活を送ることができるように心がけている。	4.12	0.82	3.87	0.98	3.95	0.96	3.96	0.94	12.42	0.00	2,3 <1
2 この学校は，生徒たちが安心して学校生活を送ることができるように心がけている。	4.17	0.80	3.87	1.01	3.87	1.00	3.95	0.96	20.18	0.00	2,3 <1
3 この学校の生徒たちは，安全な学校生活を送ることができている。	4.20	0.78	3.87	0.98	3.88	1.00	3.97	0.94	25.24	0.00	2,3 <1
4 この学校の生徒たちは，学校生活を安心して送ることができている。	4.27	0.78	3.89	0.98	3.87	1.00	4.00	0.95	34.96	0.00	2,3 <1

1：全くそう思わない⇔5：強くそう思う

3　学校の組織文化に関する認識

表 3-1 は，学校の組織文化に関する認識についての，5 件法での回答結果を，肯定的な評価の割合の高いものから順に示したものである。「少しそう思う」と「そう思う」の合算の上位 8 項目は，「5 生徒たちは，ときには無駄な時間も必要だと思っている」（65.1%），「8 生徒たちは，ミスは次のミスをしないための重要な経験だと思っている」（61.4%），「2 生徒たちは，ミス（過ちや失敗）から学ぶ」（59.8%），「1 生徒たちは，あきらめない気持ちを大切にしている」（59.2%），「4 生徒たちは，より専門的な知識や技術を学び取ることに熱心である」（58.3%），「7 生徒たちは，お互いの意見の違いを尊重しながら，違いを乗り越えようとする」（57.2%），「11 生徒たちは，学校生活におけるルールやモラルをよく守っている」（56.7%），「12 生徒たちは，物事がうまくいかない時でも，立ち直りが早い」（56.6%）であり，56%を超える。一方，「全くそう思わない」「あまりそう思わない」を合算した上位 4 項目は，「6 生徒たちは物事がうまくいかないと，あきらめる」（26.4%），「20 先生たちは，何か困ったことが生じた時の対応が遅い」（24.4%），「10 生徒たちは，困ったこと（何か問題）が生じた時に，先生たちに相談する」（22.5%），「18 先生たちは，生徒からの改善のための提案を受け入れてくれる」（21.9%）であり，否定的な回答は少ない。なお「6 生徒たちは物事がうまくいかないと，あきらめる」は逆転項目である。

表 3-2 は学年別の平均値の比較を示したものである。「5 生徒たちは，ときには無駄な時間も必要だと思っている」以外のすべての項目で，学年間の平均値に差があった。

学年別に注目すると，1 学年の平均値が他の学年よりも相対的に高い項目は，「8 生徒たちは，ミスは次のミスをしないための重要な経験だと思っている」，「1 生徒たちは，あきらめない気持ちを大切にしている」，「19 先生たちは，生徒たちから質問や意見が出されることを歓迎する」，「17 先生たちは，何か困ったことが起きた時，速やかにうまく対処してくれる」，「18 先生たちは，生徒からの改善のための提案を受け入れてくれる」の 5 項目であった。

3 学年の平均値が他の学年よりも相対的に高い項目は，「14 生徒たちは，ミスをしても大丈夫だという気持ちが強い」「10 生徒たちは，困ったこと（何か問題）が生じた時に，先生たち

表 3-1 学校の組織文化に関する認識（度数分布）

項目	①まったくそう思わな	②あまりそう思わない	③どちらともいえない	④少しそう思う	⑤強くそう思う	④＋⑤	①+②
5 生徒たちは，ときには無駄な時間も必要だと思っている。	2.2	5.4	27.4	34.8	30.3	65.1	7.6
8 生徒たちは，ミスは次のミスをしないための重要な経験だと思っている。	1.3	5.2	32.1	44.2	17.1	61.4	6.5
2 生徒たちは，ミス（過ちや失敗）から学ぶ	1.6	8.9	29.8	43.0	16.8	59.8	10.5
1 生徒たちは，あきらめない気持ちを大切にしている。	1.7	10.1	28.9	42.1	17.1	59.2	11.8
4 生徒たちは，より専門的な知識や技術を学び取ることに熱心	1.8	8.0	32.0	42.3	16.0	58.3	9.7
7 生徒たちは，お互いの意見の違いを尊重しながら，違いを乗り越えようとする。	1.6	6.2	35.0	42.8	14.3	57.2	7.9
11 生徒たちは，学校生活におけるルールやモラルをよく守っている。	2.0	9.2	32.2	41.2	15.5	56.7	11.2
12 生徒たちは，物事がうまくいかない時でも，立ち直りが早い。	0.9	4.4	38.1	42.1	14.5	56.6	5.3
19 先生たちは，生徒たちから質問や意見が出されることを歓迎する。	4.6	8.4	34.5	33.2	19.3	52.6	13.0
*16 生徒たちは，自分のミスを隠したがる。	2.1	9.4	40.7	33.7	14.0	47.7	11.6
17 先生たちは，何か困ったことが起きた時，速やかにうまく対処してくれる。	4.5	12.4	38.5	32.7	11.9	44.6	16.9
*21 先生たちは，教室で何が実際に起きているかあまり知らない。	3.0	11.3	44.5	24.1	17.0	41.2	14.3
14 生徒たちは，ミスをしても大丈夫だという気持ちが強い。	2.4	13.0	43.9	30.5	10.2	40.7	15.4
18 先生たちは，生徒からの改善のための提案を受け入れてくれる。	7.3	14.6	38.7	28.6	10.7	39.3	21.9
3 生徒たちは，先生や先輩の威厳や権威を重んじる。	4.5	14.7	41.6	27.5	11.7	39.2	19.2
9 生徒たちは，“縁の下の力持ち”のような努力を大切にする傾向が強い。	3.6	14.4	45.4	27.1	9.5	36.6	18.0
*13 生徒たちは問題や課題に向かう時に，急いで結論を出したがる。	2.0	15.1	48.5	25.7	8.8	34.5	17.0
10 生徒たちは，困ったこと（何か問題）が生じた時に，先生たちに相談する。	4.1	18.4	44.9	24.2	8.4	32.6	22.5
*20 先生たちは，何か困ったことが生じた時の対応が遅い。	4.7	19.7	43.3	20.4	11.9	32.3	24.4
*6 生徒たちは物事がうまくいかないと，あきらめる	3.3	23.1	42.4	23.1	8.2	31.3	26.4
15 生徒たちは，変化を好まない。	3.2	14.4	53.9	19.4	9.1	28.4	17.6

N=1973 数値は%，＊は逆転項目

に相談する」「15 生徒たちは，変化を好まない」の 3 項目であった。

表 3-2 学校の組織文化に関する認識 （学年別平均値・標準偏差，分散分析）

項 目 ※ ＊は逆転項目	1年 (N=564)		2年 (N=958)		3年 (N=451)		全体(N=1973)		分散分析		
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F 値	P=	下位検定
5 生徒たちは，ときには無駄な時間も必要だと思っている。	3.84	0.96	3.84	1.00	3.91	0.98	3.86	0.98	0.79	0.46	
8 生徒たちは，ミスは次のミスをしないための重要な経験だと思っている。	3.80	0.81	3.65	0.85	3.71	0.90	3.71	0.86	5.79	0.00	2<1
12 生徒たちは，物事がうまくいかない時でも，立ち直りが早い。	3.68	0.79	3.60	0.81	3.71	0.85	3.65	0.81	3.73	0.02	2<3
2 生徒たちは，ミス（過ちや失敗）から学ぶ	3.79	0.82	3.54	0.94	3.68	0.96	3.64	0.92	13.74	0.00	2<1,3
1 生徒たちは，あきらめない気持ちを大切にしている。	3.78	0.86	3.53	0.96	3.65	0.96	3.63	0.94	12.69	0.00	2<1
4 生徒たちは，より専門的な知識や技術を学び取ることに熱心	3.69	0.86	3.53	0.91	3.76	0.93	3.63	0.91	12.26	0.00	2<1,3
7 生徒たちは，お互いの意見の違いを尊重しながら，違いを乗り越えようとする。	3.74	0.81	3.53	0.87	3.67	0.89	3.62	0.86	11.43	0.00	2<1,3
11 生徒たちは，学校生活におけるルールやモラルをよく守っている。	3.69	0.87	3.47	0.95	3.73	0.90	3.59	0.92	17.02	0.00	2<1,3
19 先生たちは，生徒たちから質問や意見が出されることを歓迎する。	3.76	0.91	3.48	1.08	3.40	1.07	3.54	1.04	18.60	0.00	2,3<1
*16 生徒たちは，自分のミスを隠したがる。	3.40	0.93	3.49	0.91	3.56	0.93	3.48	0.92	4.13	0.02	1<3
*21 先生たちは，教室で何が実際に起きているかあまり知らない。	3.16	0.98	3.51	0.97	3.50	1.03	3.41	1.00	24.46	0.00	1<2,3
17 先生たちは，何か困ったことが起きた時，速やかにうまく対処してくれる。	3.54	0.88	3.24	1.01	3.34	1.06	3.35	0.99	16.57	0.00	2,3<1
14 生徒たちは，ミスをしても大丈夫だという気持ちが強い。	3.27	0.92	3.32	0.89	3.44	0.93	3.33	0.91	4.74	0.01	1,2<3
3 生徒たちは，先生や先輩の威厳や権威を重んじる。	3.35	0.97	3.17	0.99	3.38	1.02	3.27	1.00	9.36	0.00	2<1,3
9 生徒たちは，“縁の下の力持ち”のような努力を大切にする傾向が強い。	3.32	0.89	3.15	0.94	3.34	0.96	3.24	0.94	9.19	0.00	2<1,3
*13 生徒たちは問題や課題に向かう時に，急いで結論を出したがる。	3.12	0.87	3.23	0.86	3.43	0.91	3.24	0.88	16.25	0.00	1<2<3
18 先生たちは，生徒からの改善のための提案を受け入れてくれる。	3.45	0.92	3.06	1.08	3.23	1.10	3.21	1.06	25.62	0.00	2<3<1
15 生徒たちは，変化を好まない。	3.09	0.84	3.16	0.89	3.28	0.95	3.17	0.90	6.00	0.00	1,2<3
*20 先生たちは，何か困ったことが生じた時の対応が遅い。	2.87	0.99	3.21	0.99	3.38	1.06	3.15	1.02	35.85	0.00	1<2<3
10 生徒たちは，困ったこと（何か問題）が生じた時に，先生たちに相談する。	3.14	0.94	3.05	0.93	3.34	0.99	3.14	0.95	14.39	0.00	1,2<3
*6 生徒たちは物事がうまくいかないと，あきらめる	2.93	0.93	3.14	0.95	3.21	0.97	3.10	0.95	12.54	0.00	1<2,3

1：全くそう思わない⇔5：強くそう思う

1・3 学年の平均値が 2 学年よりも相対的に高い項目は，「2 生徒たちは，ミス（過ちや失敗）から学ぶ」，「7 生徒たちは，お互いの意見の違いを尊重しながら，違いを乗り越えようとする」，「4 生徒たちは，より専門的な知識や技術を学び取ることに熱心」，「11 生徒たちは，学校生活におけるルールやモラルをよく守っている」，「12 生徒たちは，物事がうまくいかない時でも，立ち直りが早い」，「3 生徒たちは，先生や先輩の威厳や権威を重んじる」，「9 生徒たちは，“縁

の下の力持ち”のような努力を大切にする傾向が強い」の 7 項目であった。

1 学年よりも 2・3 学年の平均値が相対的に高い項目は，「13 生徒たちは問題や課題に向かう時に，急いで結論を出したがる」，「20 先生たちは，何か困ったことが生じた時の対応が遅い」，「21 先生たちは，教室で何が実際に起きているかあまり知らない」，「6 生徒たちは物事がうまくいかないとあきらめる」，「16 生徒たちは，自分のミスを隠したがる」の 5 項目であった。これらはいずれも逆転項目である。

4　安全な生活のために習得すべき知識・技術の理解度と実行度に関する認識

表 4-1-1 は，安全な生活のために習得すべき知識・技術に関する 5 件法での回答結果を，理解度の割合の高いものから順に示したものである。「少し理解している」と「大変よく理解している」を合算して 7 割を超えた 8 項目は，「3 交通安全」（88.4%），「1 伝染性の病気（インフルエンザなど）の予防」（87.6%），「2 熱中症の予防や処置」（87.1%），「10 インターネットによる被害・加害の予防」（78%），「12 犯罪の被害に遭わないようにすること」（76.8%），「11 中・高校生にふさわしくない有害情報から身を守ること」（75.7%），「7 運動中のけがの予防や処置」（74.1%），「4 地震や台風など自然災害時の避難」（73.7%）であった。一方，「あまり理解していない」「まったく理解していない」の合算が 1 割を超えた 2 項目は，「8 野外での活動における安全確保」（12.2%），「6 心肺蘇生などの応急措置」（25.5%）であった。

表 4-1-1　安全な生活を送るために配慮すべき事柄についての理解（度数分布）

順位	項目	①全く理解してない	②あまり理解していない	③どちらともいえない	④少し理解している	⑤たいへんよく理解している	④＋⑤	①+②
1	3 交通安全	0.1	1.2	10.3	55.4	33.0	88.4	1.2
2	1 伝染性の病気（インフルエンザなど）の予防	0.6	2.1	9.7	57.2	30.5	87.6	2.6
3	2 熱中症の予防や処置	0.3	2.3	10.3	54.8	32.2	87.1	2.6
4	10 インターネットによる被害・加害の予防	0.5	3.8	17.7	50.9	27.1	78.0	4.3
5	12 犯罪の被害に遭わないようにすること	0.5	3.3	19.4	49.0	27.8	76.8	3.8
6	11 中・高校生にふさわしくない有害情報から身を守ること	0.6	3.4	20.3	48.5	27.3	75.7	4.0
7	7 運動中のけがの予防や処置	0.7	6.2	19.0	50.9	23.2	74.1	6.9
8	4 地震や台風など自然災害時の避難	0.2	4.8	21.3	54.4	19.3	73.7	5.0
9	5 火災時の避難	0.7	7.7	22.4	51.1	18.1	69.2	8.4
10	9 食べ物の安全	0.7	6.8	26.0	48.2	18.3	66.5	7.5
11	8 野外での活動における安全確保	1.4	10.7	29.3	44.1	14.4	58.5	12.2
12	6 心肺蘇生などの応急措置	3.9	21.6	27.6	32.6	14.3	46.9	25.5

N=1973　数値は%

表 4-1-2 は，学年別の平均値の比較を示したものである。4，5，6，9 の項目で学年間の差が見られ，この内，4，9，6 の項目で高学年ほど高い理解度となっていた。

表 4-1-2　安全な生活を送るために配慮すべき事柄についての理解（学年別平均値・標準偏差，分散分析）

項　目	1年（N=564）		2年（N=958）		3年（N=451）		全体(N=1973)		分散分析		
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F 値	*P*=	下位検定
3 交通安全	4.20	0.64	4.18	0.67	4.26	0.70	4.20	0.67	2.73	0.07	
2 熱中症の予防や処置	4.14	0.69	4.15	0.73	4.22	0.74	4.16	0.72	1.74	0.18	
1 伝染性の病気（インフルエンザなど）の予防	4.17	0.66	4.13	0.73	4.16	0.76	4.15	0.72	0.79	0.46	
10 インターネットによる被害・加害の予防	4.00	0.76	3.99	0.82	4.04	0.83	4.00	0.80	0.57	0.56	
12 犯罪の被害に遭わないようにすること	4.00	0.81	3.97	0.79	4.08	0.83	4.00	0.81	2.84	0.06	
11 中・高校生にふさわしくない有害情報から身を守ること	3.96	0.80	3.98	0.81	4.02	0.86	3.98	0.82	0.71	0.49	
7 運動中のけがの予防や処置	3.94	0.84	3.87	0.84	3.89	0.88	3.90	0.85	1.19	0.31	
4 地震や台風など自然災害時の避難	3.88	0.77	3.83	0.79	3.97	0.74	3.88	0.78	4.84	0.01	2<3
5 火災時の避難	3.83	0.82	3.72	0.87	3.87	0.83	3.78	0.85	5.93	0.00	2<1,3
9 食べ物の安全	3.73	0.83	3.72	0.87	3.90	0.83	3.77	0.85	7.05	0.00	1,2<3
8 野外での活動における安全確保	3.56	0.89	3.58	0.90	3.66	0.95	3.59	0.91	1.57	0.21	
6 心肺蘇生などの応急措置	3.16	1.10	3.39	1.03	3.36	1.14	3.32	1.08	8.67	0.00	1<2,3

1：全く理解していない⇔5：たいへんよく理解している

表 4-2-1 安全な生活を送るために配慮すべき事柄の実行可能性（度数分布・標準偏差）

順位	項目	①全くできない	②あまりできない	③どちらともいえない	④少しできる	⑤たいへんよくできる	④+⑤	①+②
1	1 伝染性の病気（インフルエンザなど）の予防	0.8	2.9	11.0	48.8	36.4	85.3	3.7
2	2 熱中症の予防や処置	0.3	2.1	13.8	48.8	35.0	83.7	2.4
3	3 交通安全	0.3	2.0	14.1	50.7	32.9	83.6	2.3
4	11 中・高校生にふさわしくない有害情報から身を守ること	0.8	3.6	21.2	45.9	28.5	74.4	4.4
5	12 犯罪の被害に遭わないようにすること	0.8	3.4	22.5	46.5	26.9	73.4	4.2
6	10 インターネットによる被害・加害の予防	0.9	4.2	22.1	48.0	24.7	72.7	5.1
7	7 運動中のけがの予防や処置	1.4	6.3	23.2	46.2	22.9	69.1	7.7
8	9 食べ物の安全	1.1	5.7	26.7	46.2	20.4	66.6	6.7
9	4 地震や台風など自然災害時の避難	0.8	6.1	27.8	47.4	17.9	65.3	6.8
10	5 火災時の避難	1.0	7.6	29.4	44.1	17.9	62.0	8.6
11	8 野外での活動における安全確保	1.9	10.0	32.2	41.0	15.0	55.9	11.9
12	6 心肺蘇生などの応急措置	11.0	21.5	31.9	24.9	10.6	35.5	32.5

N=1973 数値は%

表 4-2-1 は，表 4-1-1 と同項目についての，実行度に関する自己評価の 5 件法での回答結果を，実行度の割合の高いものから順に示したものである。「少しできる」と「たいへんよくできる」を合算して 7 割を超えたのは，「1 伝染性の病気（インフルエンザなど）の予防」（85.3%），「2 熱中症の予防や処置」（83.7%），「3 交通安全」（83.6），「11 中・高校生にふさわしくない有害情報から身を守ること」（74.4%），「12 犯罪の被害に遭わないようにすること」（73.4%），「10 インターネットによる被害・加害の予防」（72.7%）の 6 項目であった。一方，「あまりできない」と「まったくできない」の合算が 1 割を超えたのは，「8 野外での活動における安全確保」（11.9%），「6 心肺蘇生などの応急措置」（32.5%）の 2 項目であった。

表 4-2-2 安全な生活を送るために配慮すべき事柄の実行可能性（学年別平均値・標準偏差，分散分析）

項 目	1年 (N=564)		2年 (N=958)		3年 (N=451)		全体(N=1973)		分散分析		
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F 値	*P*=	下位検定
1 伝染性の病気（インフルエンザなど）の予防	4.16	0.78	4.19	0.77	4.15	0.86	4.17	0.80	0.30	0.74	
2 熱中症の予防や処置	4.12	0.76	4.16	0.75	4.22	0.78	4.16	0.76	2.03	0.13	
3 交通安全	4.11	0.74	4.13	0.74	4.20	0.77	4.14	0.75	1.78	0.17	
11 中・高校生にふさわしくない有害情報から身を守ること	3.90	0.87	4.00	0.81	4.02	0.87	3.98	0.84	3.39	0.03	
12 犯罪の被害に遭わないようにすること	3.92	0.85	3.94	0.82	4.01	0.85	3.95	0.83	1.62	0.20	
10 インターネットによる被害・加害の予防	3.84	0.85	3.94	0.81	3.95	0.89	3.91	0.84	3.17	0.04	
7 運動中のけがの予防や処置	3.83	0.93	3.83	0.88	3.83	0.91	3.83	0.90	0.01	0.99	
9 食べ物の安全	3.74	0.86	3.79	0.86	3.85	0.88	3.79	0.87	2.04	0.13	
4 地震や台風など自然災害時の避難	3.74	0.86	3.72	0.85	3.85	0.82	3.76	0.84	3.45	0.03	
5 火災時の避難	3.69	0.89	3.68	0.87	3.77	0.89	3.70	0.88	1.67	0.19	2<3
8 野外での活動における安全確保	3.50	0.96	3.59	0.89	3.62	0.95	3.57	0.93	2.38	0.09	
6 心肺蘇生などの応急措置	2.87	1.19	3.09	1.10	3.09	1.20	3.03	1.15	7.20	0.00	1<2,3

1：全くできない⇔5：たいへんよくできる

表 4-2-2 は，学年別の平均値の比較を示したものである。5 と 6 の 2 項目で学年間の差が見られ，いずれも高学年ほど実行度が高かった。

表 4-3 は，安全な生活のために習得すべき知識・技術の理解度と実行度の平均値の差を示したものである。有意差のあった項目は，「6 心肺蘇生などの応急措

表 4-3 各項目における理解度と実行度に関する自己評価の差

項目	「理解度」−「実行度」の差		t 値	自由度	*P*=
	平均値	SD			
6 心肺蘇生などの応急措置	0.29	0.84	15.44	1972	0.00
4 地震や台風など自然災害時の避難	0.12	0.74	7.33	1972	0.00
10 インターネットによる被害・加害の予防	0.09	0.72	5.44	1972	0.00
5 火災時の避難	0.08	0.74	4.81	1972	0.00
7 運動中のけがの予防や処置	0.07	0.72	4.16	1972	0.00
3 交通安全	0.06	0.66	4.21	1972	0.00
12 犯罪の被害に遭わないようにすること	0.05	0.69	3.18	1972	0.00
8 野外での活動における安全確保	0.02	0.74	1.33	1972	0.18
11 中・高校生にふさわしくない有害情報から身を守ること	0.01	0.70	0.45	1972	0.65
2 熱中症の予防や処置	0.01	0.71	0.32	1972	0.75
1 伝染性の病気（インフルエンザなど）の予防	-0.02	0.74	-1.39	1972	0.16
9 食べ物の安全	-0.03	0.70	-1.60	1972	0.11

置」,「4 地震や台風など自然災害時の避難」,「10 インターネットによる被害・加害の予防」,「5 火災時の避難」,「7 運動中のけがの予防や処置」「3 交通安全」,「12 犯罪の被害にあわないようにすること」の 7 項目であった。

5　突発的な事象に対する対処の仕方の理解

表 5-1 は，学校において突発的な事象が生じたときの対処法に対する理解度の自己評価についての，5 件法での回答結果を，肯定的な評価の割合の高いものから順に示したものである。「十分にわかっている」と「少しわかっている」の肯定的評価の割合が高いのは，地震（83.1%）および火災（76.1%）が生じたときの対処である。「わかっていない」と「あまりわかっていない」の否定的評価の合算で最も高いのは「実験や実習中に事故が起きたときの対処」（17.4%）である。

表 5-1　突発的な事象に対する対処の仕方の理解（度数分布）

項目	①全く分かっていない	②ほとんど分かっていない	③どちらともいえない	④少しは分かっている	⑤十分に分かっている	④＋⑤	①+②
1 学校にいるときに地震が発生したときの対処	0.6	3.5	12.8	57.2	25.9	83.1	4.2
3 学校にいるときに火災が発生したときの対処	0.8	5.4	17.6	54.0	22.1	76.1	6.2
4 授業中や部活動中に急病になった人がいるときの対処	2.2	11.5	28.7	41.4	16.2	57.5	13.7
2 校内に不審者が立ち入ったときの対処	3.1	13.1	26.8	42.0	15.1	57.1	16.2
5 実験や実習中に事故が起きたときの対処	2.6	14.7	33.8	36.3	12.5	48.8	17.4
6 学校にいるときに生じた突発的な出来事（上の1～5以外）への対処	2.7	12.9	38.9	34.4	11.2	45.5	15.6

N=1973 数値は%

表 5-2 は，学年別の平均値の比較を示したものである。「3 火災への対処」を除いて，3 学年で肯定的な評価が高かった。

表 5-2　突発的な事象に対する対処の仕方の理解（学年別平均値・標準偏差，分散分析）

項　目	1年（N=564）		2年（N=958）		3年（N=451）		全体（N=1973）		分散分析		
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F 値	P=	下位検定
1 学校にいるときに地震が発生したときの対処	3.97	0.80	4.04	0.74	4.13	0.75	4.04	0.76	5.46	0.00	1<3
3 学校にいるときに火災が発生したときの対処	3.91	0.83	3.89	0.80	3.95	0.87	3.91	0.83	0.78	0.46	
4 授業中や部活動中に急病になった人がいるときの対処	3.52	0.95	3.54	0.97	3.72	0.96	3.58	0.97	6.17	0.00	1,2<3
2 校内に不審者が立ち入ったときの対処	3.50	0.98	3.49	1.00	3.64	1.02	3.53	1.00	3.52	0.03	2<3
5 実験や実習中に事故が起きたときの対処	3.38	0.93	3.36	0.98	3.57	1.00	3.41	0.97	7.39	0.00	1,2<3
6 学校にいるときに生じた突発的な出来事（上の1～5以外）への対処	3.36	0.90	3.32	0.93	3.55	0.98	3.38	0.94	9.34	0.00	1,2<3

1：全く分かっていない⇔5：十分に分かっている

6　安全な生活を送るための日常的な注意

表 6-1 は，安全な生活を送るために普段からどの程度気をつけているかについて 10 項目についての，5 件法での回答結果を，「気をつけている」とする肯定的な評価の割合の高いものから順に示したものである。

いずれの項目についても，「気をつけている」との回答割合が 50%を超える。「10 ルールやマナーを守ること」「2 危ないものには近付かないという心がまえ」「1 自分の身は自分で守るという心がまえ」の 3 項目はとくに肯定的な回答割合が高く，ほぼ 90%に達する。相対的に肯定的な回答割合が低いのは，「8 災害や犯罪などの危険があると思われる箇所の点検・改善」「9 地域で行われる安全対策のための活動への参加」である。

表 6-1 安全な生活を送るための日常的な注意（度数分布）

項目	①全く気をつけていない	②あまり気をつけていない	③どちらともいえない	④少しは気をつけている	⑤十分に気をつけている	④+⑤	①+②
10 ルールやマナーを守ること	0.4	0.7	9.8	43.3	45.9	89.2	1.0
2 危ないものには近付かないという心がまえ	0.3	1.9	8.7	42.5	46.6	89.1	2.2
1 自分の身は自分で守るという心がまえ	0.3	2.0	8.7	50.0	39.0	89.1	2.3
6 あいさつの励行や声かけなど人同士のつながりを持つこと	0.8	2.6	14.7	43.8	38.1	81.9	3.3
5 施錠をするなど，危険が生じにくくなるような安全対策の徹底	0.5	4.3	16.4	45.6	33.2	78.9	4.8
4 安全な生活を送るための知識や情報を得ること	0.5	4.4	19.4	48.5	27.3	75.8	4.9
3 緊急用品の携帯など事件や事故が起きたときのための備えを持つこと	1.6	6.0	19.6	41.0	31.9	72.9	7.6
7 災害や犯罪などの危険に関する情報の共有	0.6	5.2	25.8	44.8	23.7	68.4	5.8
8 災害や犯罪などの危険があると思われる箇所の点検・改善	1.5	10.7	30.9	38.0	19.0	56.9	12.2
9 地域で行われる安全対策のための活動への参加	7.2	13.7	25.9	35.0	18.2	53.2	20.9

N=1973 数値は%

表 6-2 は，学年別の平均値の比較を示したものである。学年間の差はほとんど見られず，「9 地域で行われる安全対策のための活動への参加」のみ，3 年生で肯定的な評価が高かった。

表 6-2 安全な生活を送るための日常的な注意（学年別平均値・標準偏差，分散分析）

項 目	1年 (N=564)		2年 (N=958)		3年 (N=451)		全体 (N=1973)		分散分析		
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F 値	P=	下位検定
10 ルールやマナーを守ること	4.30	0.74	4.33	0.69	4.39	0.70	4.34	0.71	2.00	0.14	
2 危ないものには近付かないという心がまえ	4.31	0.75	4.32	0.75	4.37	0.72	4.33	0.74	1.04	0.35	
1 自分の身は自分で守るという心がまえ	4.24	0.72	4.25	0.72	4.29	0.72	4.26	0.72	0.74	0.48	
6 あいさつの励行や声かけなど人同士のつながりを持つこと	4.18	0.81	4.12	0.83	4.23	0.81	4.16	0.82	2.97	0.05	
5 施錠をするなど，危険が生じにくくなるような安全対策の徹底	4.08	0.50	4.07	0.83	4.06	0.86	4.07	0.84	0.07	0.93	
4 安全な生活を送るための知識や情報を得ること	3.97	0.82	3.96	0.83	4.03	0.83	3.98	0.83	1.30	0.27	
3 緊急用品の携帯など事件や事故が起きたときのための備えを持つこと	3.93	0.97	3.92	0.95	4.05	0.92	3.96	0.95	3.06	0.05	
7 災害や犯罪などの危険に関する情報の共有	3.86	0.84	3.83	0.86	3.91	0.88	3.86	0.86	1.40	0.25	
8 災害や犯罪などの危険があると思われる箇所の点検・改善	3.59	0.96	3.59	0.96	3.72	0.95	3.62	0.96	2.86	0.06	
9 地域で行われる安全対策のための活動への参加	3.42	1.12	3.37	1.17	3.58	1.14	3.43	1.15	4.99	0.01	2<3

1：全く気をつけていない⇔5：十分に気をつけている

Ⅳ．考察

1 「身の回りの安全」の考え方

安全な暮らしを送るためには，自己防衛と環境および条件整備の両者について，「いずれか」ではなく「いずれも」がともに非常に重視されていることからは，自分自身が主体的な危機管理を行う必要があるとの認識が強いことが推測される。一方で，安全の捉え方に対しては，受動的な安全として「事故が起きない状態」，能動的な安全として「事故を回避できる状態」の区別の有無を確認することを意図したが，両者の差は見られなかった。

2　安全・安心な学校に対する認識

設問は，①安全と安心の両者に対する認識の差異の有無と②学校の配慮と営為および生徒の実情を組み合わせた項目であり，安全と安心の二つについて，学校がそれらに留意しているかと生徒たちの生活実感を問うことを意図した。結論から言えば，生徒において安全と安心は峻別されていないこと，学校が安全・安心な学校生活の実現に努力し，生徒たち自身も安全・安心な学校生活を送ることができているという実感を持っていることが示された。また，それは1 学年でより強いため，2 学年以上では自校の状況に慣れ，彼らのいる状況を自明視する傾向が現れていることが推察される。

3　学校の組織文化に関する認識

生徒たちは全般的に自分たち自身を前向きな姿勢を持つ存在だと捉えていることがうかがわれる。肯定的な評価の上位項目は，学ぶことに前向きで，相互理解に努め，ルールやモラルを守り，物事がうまくいかなくても立ち直りが早いと捉えていることがわかる。一方で，教師たちについては，生徒の要望や意見を受け容れ，適切に対応してくれるという点では，高学年では必ずしも肯定的には捉えていない。この傾向は 2・3 学年に比べて 1 学年で教師に対する好意的な評価が高いことに顕著に表れている。逆に，2・3 学年では生徒たちの様子についてより肯定的な見解が伺われる。

この点では生徒たちが創り出し，彼らの間に共有される文化が重要な役割を果たしていることが推測される。生徒たちのあるべき姿や教師との関係などに対する基本的な態度を構築しているという意味で，生徒にとっての学校組織文化が存在するといってもよい[注4)]。それゆえ，生徒たち自身が構築・管理・制御している空間については肯定的・受容的な捉え方をしている一方で，教師たちとの相互作用において成立する関係については相対的でやや批判的な捉え方がなされていると推察できる。

4　安全な生活のために習得すべき知識・技術の理解度と実行度に関する認識

設問は，安全な生活のために理解している事柄を実際場面で行うことができるかどうかについての認識を問うことを意図した。結果として「心肺蘇生などの応急措置」，「運動中のけがの予防や処置」，「地震や台風など自然災害時の避難」，「火災時の避難」，「交通安全」，「インターネットによる被害・加害の予防」，「犯罪の被害にあわないようにすること」の 7 項目は，理解度と実行度に有意差があったことから，知識があっても実行となると自信が低下する様子がうかがわれる。どの項目も命を守るために身に付けておくべき知識と技能である。理解度・実行度共に最小値の「心肺蘇生など応急処置」においては，他者の命を救う行為であり，必要とされる場面で実行できなければ知識は意味をなさない。近年の災害，事件・事故の頻度を考慮すれば，学んだ知識を役立てる場面に遭遇する可能性が低いとは言えない。非常時に適切な対応ができる資質能力を育むためのプログラム開発やカリキュラムマネジメントが求められる。

5　突発的な事象に対する対処の仕方の理解

生徒たちは学校において突発的な事象が生じたときの対処法は概ね「わかっている」と捉えていた。項目の順位を見ると，「地震」，「火災」，「急病人の発生」，「不審者の侵入」という近年耳目を集めた危機や学校管理上求められる避難訓練や警戒態勢に力点が置かれている様子がう

かがわれる一方で，教科における「実験や実習中の事故」についての肯定的回答割合は相対的に低かった。授業中の振る舞いという日常に埋め込まれた“危機”であるがゆえにあえて注視されていない可能性もある。しかしながら，この項目は，生徒にとって最も身近であり，かつ，発生の頻度も高いと想定されるため，十分に理解しておく必要性の高い対処法と考える。

6　安全な生活を送るための日常的な注意

安全な生活を送るためには普段から気をつけている事項の回答からは，自らを自らが守るという基本的な心構えに基づき，自らが社会的規範や慣習から逸脱しないことを，心がけているという傾向があると解釈できる。一方で，より積極的な安全確保のための行動と解することができる「災害や犯罪などの危険があると思われる箇所の点検・改善」や「地域で行われる安全対策のための活動への参加」については，相対的に肯定的回答割合が低く，「身を守る」意識と「安全をつくる」意識は必ずしも一貫していない可能性がある。そのため，教師主導に従う傍観者的な「受動的な安全」だけはなく，生徒一人一人が自分事として捉えて行動できるようになる「能動的な安全」という観念に基づいた学習あるいは実践的活動の工夫が期待される。

7　小括

高校生にとっての安全・安心の認識は，彼ら自身の個人としての安全・安心に関わる力量の評価および彼らの所属校の文化が影響を及ぼしていると考えられる。前者については学習の蓄積が，後者については，とくに，学校に対する信頼とともに学校文化への適応・習熟が重要な役割を果たしていることが推察できる。そのように考えられる根拠は，学年毎の結果を比較すると全項目というわけではないが，1 学年よりも 3 学年のほうが肯定的な回答傾向を示していることである。このことは，学校と生徒たちが学校生活の中で共有している安全・安心を重視しようとする価値づけが彼らの学習や認識に影響を与えていること，付言すれば，形式的な安全管理や安全教育だけで安全・安心の認識は担保できないことを示唆している。

Ⅴ．成果と課題

本調査においては，高校生は「自校が生徒たちの安全・安心な学校生活を送ることができるように心がけ」，生徒たちも「安全・安心な学校生活を送ることができる」と全般的に肯定的な捉え方をしていることが明らかになった。実生活で生じうる自然災害や事故への備えに対する生徒自身の理解度や実行度についても相対的に自己評価が高いことが示された。そしてそれは，学校の組織文化として安全・安心の担保を重視する必要性も示唆する。

ただし，これらの結果は，あくまで個々人の認識に基づく評価であり，必ずしも客観的事実や実態を把握できていないという点は本調査の限界である。よって，今後は本調査で明らかにした高校生たち自身の認識と各学校で実際に行われている具体的な取組との関連性を把握する必要がある。また，本調査の調査対象となった高校生に基づく「安全・安心」観であるため，得られた知見の普遍性・妥当性については検証が必要である。

付記

本研究は JSPS 科研費 17K04631 （「学校における危機管理体制構築に関する組織文化論的

アプローチによる開発的研究」（平成 29～31 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤C））研究代表者　福本昌之）の助成を受けている。本稿は 2019 年 9 月 21 日，岡山大学教育学部において開催された日本教師教育学会第 29 回研究大会において，「学校安全に関する組織文化論的考察―高校生の安全意識に注目して―」の題目で発表した内容をもとに修正を加えたものである。本稿の作成にあたっては，共同研究者全員による調査票の設計を経て，共同討議を経て，Ⅰ，ⅡおよびⅤを共同執筆し，Ⅲ・Ⅳの１～３を福本，４～６を難波が執筆し，最終調整を福本が行った。最後に調査に協力していただいた関係者に対して，この場を借りて謝意を表する。

注

1）一方で「生徒の学業達成と安全な学校環境は相互依存的であり，安全は成功にとって不可欠である。すなわち，安全が欠如していれば学校はその使命を果たせないし，生徒たちは彼らの潜在能力を発揮できない」（Bloomington Public Schools. 2013）といった学校安全に対するビジョンを提示する教育機関もある。

2）『モノグラフ・高校生』はベネッセ教育総合研究所から 1980 年 2 月以降，73 号が発刊され，各号において高校生の学習・生活実態等について様々な調査結果が報告された（深谷 2004:4）。

3）前者は Safety-I，後者は Safety-II に対応することを想定したものだが，今回の質問においてはその区別を捉えることはできなかった。

4）組織文化は企業など一定の協働体系として捉えられる組織に対して措定される概念であり，生徒集団を組織として把捉できるかという疑問もないわけではないが，ここでは Schein, E.H.（1992）の構成概念に依拠し，生徒間において当該校に特有の価値や暗黙の前提が共有されているという仮説に基づき，その機能的な役割に注目するためこの語を用いる。

参考文献

1）明石要一（2016）『高校生の安全に関する意識調査報告書―日本・米国・中国・韓国の比較』，国立青少年教育振興機構.
（http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/108/ (2019.9.18 最終確認)）

2）Bloomington Public Schools (2013). Final Report and Recommendations: School Safety & Security Review Plan. April 29 2013.
（https://www.bloomington.k12.mn.us/sites/default/files/content_file_attachments/130429%20School%20Safety%20%26%20Security%20Report_0.pdf (2019.9.18 最終確認)）

3）独立行政法人 国立青少年教育振興機構 (2015)『高校生の安全に関する意識調査報告書―日本・米国・中国・韓国の比較―』（http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/98/ (2019.9.18 最終確認)）

4）深谷昌志（2004）「『モノグラフ・高校生』をふりかえって」，ベネッセ教育総合研究所『モノグラフ・高校生特別号』4-7.
（http://a111.g.akamai.net/f/111/143111/15m/benesse1.download.akamai.com/143111/j/monographpdf/3/3-vol-sp01.pdf (2019.9.18 最終確認)）

5）Hoy, W.K. Gage, C. WQ. Tarter, C. J. (2004) Theoretical and Empirical Foundations of Mindful Schools. In W. K. Hoy, et. al. (Eds.) *Educational Administration, Policy, and Reform: Research and Measurement.* Greenwich, CT: Information Age. 305-335.

6）ホルナゲル, E.（2014）「Safety I から Safety Ⅱ へ―レジリエンス工学入門」『オペレーション

ズ・リサーチ：経営の科学』59(8)，435-439.
７）ホルナゲル，E.（2015）（北村・松原・狩川訳）『Safety-I & safety-II：安全マネジメントの過去と未来』，海文堂出版.
８）小林一也・吉本二郎（1979）『学校安全』（現代学校教育全集第８巻），ぎょうせい.
９）小柳雅子（2013）「学校危機管理に関する研究動向と学校経営」，学校経営研究，38，21-28.
１０）前田晴男（2009）「学校の危機管理に関する理論的考察―リスクマネジメント概念の分析を通じて」教育経営学研究紀要，12，45-52.
１１）宮田丈夫・奥田真丈・宇留田敬一・杉山正一（編）（1963）『安全教育の管理と指導』，東洋館出版.
１２）文部省（1993）『学制百二十年史』，ぎょうせい.
１３）文部科学省（2010）『学校安全参考資料「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育』（改訂版），文部科学省.
１４）文部科学省（2018）『学校の危機管理マニュアル作成の手引』，独立行政法人日本スポーツ振興センター安全部.
（https://anzenkyouiku.mext.go.jp/mextshiryou/data/aratanakikijisyou_all.pdf
(2019.9.18 最終確認)）
１５）大泉光一（2004）『危機管理学研究』［第２版］，文眞堂.
１６）奥田真丈（1963）「学校の安全管理関する行政」，宮田丈夫ほか編『安全教育の管理と指導』，東洋館出版社，15-22.
１７）Schein, E.H.（1992）*Organizational Culture and Leadership. 2nd. Ed.* CA: Jossey-Bass.
１８）宇都宮市（2017）「安全で安心して暮らせるまちづくりに関する市民アンケート調査結果」（平成 28 年）.
（https://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/kurashi/anshin/bouhan/1003469.html
(2019.9.18 最終確認)）
１９）ワイク，K, E.・サトクリフ, K. M.（2017）（中西・杉原・高信頼性組織研究会訳）『想定外のマネジメント：高信頼性組織とは何か』，文眞堂.

A Survey on School Safety and Security Feeling (1)

—An Overview of High School Students' Consciousness of School Safety Promotion and Self-Awareness—

FUKUMOTO, M., NAMBA, T., IKEDA, T. and YUTO, S.

Abstract

The purpose of this paper is to survey high school students' consciousness of school safety and their self-awareness by means of a descriptive questionnaire given to 1,973 students. The results show that most of the respondets have a positive feeling about their school in that 1) they feel their schools attempt to keep the school safe, and that 2) they themselves attempt to make their school life safe. It may be concluded that the high school students' consciousness of school safety depends both on their self-awareness and on the school culture they belong to. This suggests that their reliance on school and their adaption to school culture play an important part in constructing school safety consciousness.

【Key words】　School Safety, High School Students, Safety Promotion, Crisis Management, School Organizational Culture